

# 九世紀初頭における帝位継承とテマ反乱

——スラヴ人トマスの乱を中心に——

中 谷 功 治

はじめに ——ある伝説から——

アナトリコイ軍団<sup>テマ</sup>の將軍となつたバルダネス・トゥルコス（トルコ人）は、手の者三名をつれて軍管区<sup>テマ</sup>の中心都市アモリオン近郊のフィロメリオンという地に向いた。それは、この地に暮らす修道士から予言をもらうためであった。訪問を受けた修道士は、たちどころに皇帝になるといふバルダネスの野心を言い当て、そのような企ては財産と視力を奪ふことになるかと警告した。失望した將軍は庵を出て、馬のそばで待つ従者たちの所へ向かったが、これを見た予言者は彼を呼び止めた。もしやと思つて引き返したバルダネスに修道士が告げた言葉は前と同じであつたが、彼はさらに続けた。

「今お前が連れてきている馬まわりの者たち三名の内、最初と二番目の者は帝冠を帯びるであろう。そして第三の者は自身を皇帝と宣言するものの、すぐに処刑されるだろう。」

バルダネスは悲嘆の声を上げて修道士に悪態をつきつつ、その予言を従者二名に伝えた。

「レオンよ、お前は皇帝となり、そしてトマスよ、お前は（皇帝に）宣言されるが、ミカエルによって（二人は）殺され、彼自身はまったく害されることなく帝位にとどまる。」<sup>(1)</sup>

以上は、將軍バルダネスが生きた九世紀初頭から一世紀以上後の一〇世紀なかばに編纂された歴史書、ゲネシオスの『皇帝列伝』が伝えるもちろんだ空のエピソードである。<sup>(2)</sup>

ここに登場するアナトリコイ將軍でトルコ人というあだ名のバルダネス、後に皇帝となるアルメニア人レオン（五世）、彼を襲って皇帝となるアモリオン出身のミカエル（二世）、そして大反乱の首謀者となるスラヴ人と呼ばれるトマスの四名が本稿の主人公である。

以下では、時系列に沿って將軍バルダネスの反乱、レオン五世の即位とミカエル二世の帝位篡奪、そして僭称者トマスによる大反乱の順に、登場人物たちの経歴と小アジアのテマ軍団や首都勢力の動向に焦点をあてつつ考察を進める。とりわけスラヴ人トマスの乱については研究史を詳しく紹介し、最後の「テマ反乱」という筆者の考えを導くことにしたい。

## 一 將軍バルダネスとテマ反乱

バルダネスはトルコ人というあだ名を持つものの、名前からはアルメニア系であることが推測される。彼の詳しい

経歴はわかっていない。前述のエピソードと同時期に編纂された『テオフアネス年代記』は、七九七年に皇帝コンスタンティノス六世がビチュニアに派遣したパトリキオスの爵位を持ち近衛連隊スコライの司令官バルダニオス<sup>(3)</sup>、そして七九九年の復活祭時に女帝エイレネの乗る馬車の御者をつとめた四名のパトリキオスの一人、トラケシオイのテマ將軍のバルダネスなる人物に言及する<sup>(4)</sup>。通説では、これらのよく似た名前をもつ二人のパトリキオスは前述のアナトリコイ將軍と同一人物とされる<sup>(5)</sup>。それが正しいなら、トルコ人バルダネスは八世紀末から九世紀初頭にかけて、最上級の軍歴を歩んだ有力者ということになる。

ともかく、バルダネスは先に紹介した予言にもかかわらず帝位を目指すことになった。『テオフアネス年代記』は、八〇三年七月一九日にアナトリコイ將軍のバルダネスが「対岸の（つまり小アジアの）」テマ軍団によつて皇帝に推戴されたと伝える<sup>(6)</sup>。それは前年一〇月、税務長官ニケフォロスを擁立するクーデタによりエイレネ女帝政權が倒れて一年を待たずに発生した大規模な軍事反乱であった。ゲネシオスの『皇帝列伝』と同時期に成立したとされる『続テオフアネス』では、バルダネスは小アジアの五つのテマ軍団の単独將軍<sup>モナスヒョウテアネス</sup>に任命されており、彼の反乱はアルメニアコイを除くすべてのテマ軍団が支持したという<sup>(7)</sup>。

トルコ人バルダネスの反乱は、七九七年のコンスタンティノス六世の失脚、その後のエイレネ女帝政權下での宦官たちによるおもなテマ軍団の掌握を含めた政治の壟断、そして八〇二年の首都でのクーデタなど一連のコンスタンティノブル政府内での動きに対して小アジアのテマ軍団が独自の皇帝候補を擁立したものである。複数のテマ軍団が参加し、首都を目指したという経緯から見て、「テマ反乱」の典型といつてよいだろう<sup>(8)</sup>。ただし、今回は七一九年のレオン三世や七九〇年のアルメニアコイ反乱時のように、政權の交代を実現させることはできなかった。テマ反乱が不発に終わったのはこのトルコ人バルダネスの乱がはじめてである。

『テオファネス年代記』は、当初バルダネスは將兵たちの要請を拒否したと伝える。これは皇帝候補者のお決まりのポーズなのかもしれないが、その後の彼の優柔不断な行動からは、バルダネスは將兵たちにかつがれただけという可能性も残る<sup>(9)</sup>。予言のエピソードはバルダネスの野心を強調しているが、もしかすると反乱はかつてのアルメニアコイ反乱のケースと同様、現地のテマ將兵たちが主導して引き起こしたのかもしれない。ホルドンはその可能性を支持している<sup>(10)</sup>。他方、反乱の名目はエイレネの復位にあったとも伝えられるが、彼女は八月九日に追放先のレスボス島で死去した<sup>(11)</sup>。

ともかく、バルダネスとテマ軍団は首都対岸のクリュソポリスまで進出したが、町は門を閉ざしたまま八日が過ぎ、反乱軍はオプシキオン領内にある兵站拠点のマラギナまでいったん退いた。

おそらくこの頃、バルダネスの配下のアルメニア人レオンとアモリオン人ミカエルが皇帝側に寝返ったらしい。このことも彼のその後の弱気につながったかもしれないが、この「功績」によりレオンはフォイデラトイの師団長 (*tourmarches ton phoideraton*)、ミカエルは幕僚長 (*komes (es) kortes*) に任じられ、それぞれ首都内に宮殿を与えられた<sup>(12)</sup>。

ここに登場する「フォイデラトイ」とはアナトリコイ軍団の下部単位で師団 (*tourma*) に相当し、さらに領域としては軍管区テマの下位にあたる。実際フォイデラトイ師団長は九世紀中頃の官職リスト、いわゆる「ウスペンスキーのタクテイコン」にテマの筆頭師団長として登場する<sup>(13)</sup>。つまりレオンはアナトリコイ軍団の実質上のナンバー二に拔擢されたのである。一方、ミカエルが就任した幕僚長は、同じくアナトリコイ軍団の將軍の属僚とも考えられるが、テマの固有名がないので皇帝直属の役職であった可能性が指摘されている。いずれにせよ、こちらもテマ將軍などに次ぐ重要な軍事職といえるだろう。

話を反乱に戻すと、マラギナに駐屯するトルコ人バルダネスは、膠着状態を打破するため皇帝ニケフォロス一世と交渉に入った。詳細は不明だが、結局彼は自分の身の安全を保証する総主教と政府要人（パトリキオス全員）の署名が入った皇帝の書面を手に入れ、九月八日の夜半に密かに陣営を抜け出した。彼はスラヴ人トマスだけをともなうてビチュニアの港町キオスにあるヘラクレイオン修道院へと向かい、その後、皇帝が用意した船でマルマラ海のプロテ島にある自身が創建した修道院に移った。<sup>(15)</sup>

こうして首魁を失った反乱はあつげなく瓦解した。皇帝ニケフォロスはバルダネスの財産を没収し、「諸テマの将校や土地所有者の全員、そして帝都からの幾人かを逮捕し、軍隊には給料を支払わなかった」という。<sup>(16)</sup>

さらに翌年、皇帝はリュカオニア人たちを夜間密かにプロテ島に渡らせ、バルダネスの視力を奪った。このことを知った「総主教、元老院、そして神をおそれるすべての人々はいたく嘆き悲しんだ」。<sup>(17)</sup>これに対し皇帝は何も知らないふりをしてリュカオニア人たちの搜索を「高官たち (vous an telai)」に誓ったが、彼らは教会に逃げ込んで事件はうやむやとなった。

ここでのリュカオニア人とは誰のことだろうか。「ウスペンスキーのタクテイコン」では先述のフォイデラトイと並んでリュカオニアの師団長の名前が登場する。つまり、リュカオニア人とは、アナトリコイ軍管区の下位領域としてのリュカオニアの兵士たちだろう、とマンゴは推測している。<sup>(18)</sup>けれども、どうして彼らが首都にいたのかは不明である。

一方、中期ビザンツ帝国における近衛隊（オプシキオン軍団や近衛連隊タグマを含む）について詳しく研究したホルドンは、ニケフォロス一世はその治世中フォイデラトイを自身の手足として活動する近衛連隊として用いたと推測している。<sup>(19)</sup>つまり、ホルドンの考えによるなら、アルメニア人レオンは近衛連隊の指揮官の一人に任命されたことに

なる。だとすると、フォイデラトイと並ぶアナトリコイの師団リユカオニアの兵士たちの一部も首都で皇帝の手もとにあったのかもしれない。アルメニア人レオンの同僚であるミカエルもアナトリコイの首都アモリオンの出身であり、皇帝ないしアナトリコイの幕僚長に就任していたから、バルダネスの反乱を鎮めたニケフォロスは、信頼するレオンやミカエルたち（あるいは彼らの手下）を使って、首謀者の將軍の視力を奪わせたという推測が可能となる<sup>(20)</sup>。

ちなみに、次章で述べる皇帝レオン五世やミカエル二世の出世のパターンからは、外敵との戦闘を通じて軍歴を積み上げ、親征する皇帝とのよしみをもとに出世するテマ軍団叩き上げの軍人ではなく、有力將軍から皇帝へと権力者によりそって地位を上昇させる抜け目ない者たちの姿が見えてくるように思う<sup>(21)</sup>。

## 二一 レオン五世とミカエル二世の即位

### (1) レオン五世（在位八三—二〇年）

トルコ人バルダネスの反乱から一〇年目の八一三年、アルメニア人レオンは修道士の予言どおり皇帝の座についてた。本章では、レオン五世の皇帝就任への道のり、彼が殺害された八二〇年の宮廷クーデタ、そしてそれに続くミカエル二世の即位について簡潔に概観する。

アルメニア人レオンの経歴も詳しくはわかっていない。とはいえ、彼はアルメニア系でパトリキオス位にあったバルダスという人物の息子であったと史料にはある<sup>(22)</sup>。レオンはアナトリコイ・テマの領内で成長し、伝説にあるようにトルコ人バルダネスに仕えたようである。バルダネス反乱の際にアモリオ人ミカエルとともに皇帝側に寝返り、その報酬としてニケフォロス一世からフォイデラトイ師団長の職と首都内の宮殿を与えられたことはすでに述べた。と

もかく、レオンもまたバルダネスと同様に帝国のエリート軍人であったと考えられる。

その後、彼はアルメニアコイ将軍に昇進したらしいが、八一一年二月にテマ領内のエウカイタにおいてイスラーム軍の攻撃を受け、多くの兵士の命と軍団への給料一、三〇〇金ポンドを失った。<sup>(23)</sup> このため皇帝の不興を買ったレオンは失脚したらしい。<sup>(24)</sup>

けれども、直後のブルガリア戦役での皇帝の敗死をうけて、後継者のミカエル一世はレオンをアナトリコイ将軍に抜擢したらしく、今回レオンは侵入したイスラーム軍を打ち破って敵兵士二千人を倒し、軍馬と武器を獲得した。<sup>(25)</sup>

八一三年六月、レオンはトラキアに出陣したが、アドリアノープル近くのベルシニキア（ヴェルシニキア）で帝国側は総崩れとなり、首都へ逃げ帰るミカエル一世はテマ軍団の指揮をレオンにゆだねた。<sup>(26)</sup> 皇帝の逃亡を知った將軍や兵士たちは、相談のうえアナトリコイ将軍であるレオンの皇帝擁立を目指した。レオンは当初は就任を固辞したものの<sup>(27)</sup>（これもまた単なるポーズかもしれない）その後、総主教ニケフォロスに手紙を書いてその決意を固めた。七月一日、首都郊外のヘブドモンに到着すると、將兵たちはレオンを皇帝として歎呼した。<sup>(28)</sup> カルシオス門（現エディルネ門）より首都に入場したレオンは宮殿入りし、翌日に聖ソフィア大聖堂で総主教ニケフォロスによって帝冠を受けた。

十年前、首都に迫ったアナトリコイ將軍のトルコ人バルダネスには首都対岸のクリュソポリスの町は開門されることはなかったが、今回はブルガリア軍の接近という切迫した状況下で同じアナトリコイ將軍のレオンにコンスタンティノープルの城門は開かれた。<sup>(30)</sup> それは約一世紀前にアナトリコイ將軍レオン（三世）が首都に入場したことを思い出させる。ターナーは両者の即位はともに先帝の退位にともなうスムーズな継承（禪讓）と見なしているが、<sup>(31)</sup> 実際には軍隊によるレオンの皇帝歎呼が先行しており、やはり篡奪に相当すると私は考える。

一方、ブルガリアの君主<sup>カ</sup>のクルムは、兄弟にアドリアノーブル攻囲をまかせ、自身はコンスタンティノーブルに来て陸城壁の前を行進した。その後、帝国との和平交渉時に暗殺をはかられて、激怒したクルムは、首都の北東に位置する聖マサスの建物を焼いて略奪を加え、さらに近郊のトラキア諸都市を文字どおり手当たり次第に襲撃した。結果、コンスタンティノーブルの大城壁までは丸裸の状態となった。おびただしい捕虜と略奪品を手にしたブルガリア軍は、九月に長く籠城したアドリアノーブルを降伏・開城させた後、いったん故国に帰還した。<sup>(33)</sup>

レオン五世とビザンツ帝国にとって幸いだったのは、コンスタンティノーブル攻撃を準備していたクルムが翌年四月に急死したことである。その後、紆余曲折はあったものの、八一八年にレオンはクルムの後継者であるオムルタグ<sup>(34)</sup>（在位八一四／五―三二年）と和平を結び、帝国は荒廃したトラキアの再建に尽力することになった。

次に史料から引き出せる情報はあまり多くないが、レオン五世の政権を支えた人々について考察しておこう。まずレオンは同僚のアモリオン出身のミカエルを昇進させた。当時ミカエルはアナトリコイ軍団の馬丁長（プロトストラトル）としてレオンのそばにあったようだが、パトリキオス位を授けられた上でエクスクビテス近衛連隊長となった。同様にかつての仲間であるスラヴ人トマスも、レオンが以前つとめたフォイデラトイ師団長に任命された。<sup>(35)</sup>

次に、オルビアノスなる人物がマケドニア將軍に指名されたようである。テマ・マケドニアの將軍職はレオンの即位前にはヨハネス・アブラケスが占めていたが、彼はベルシニキア会戦で戦死していた。<sup>(36)</sup> オルビアノスはミカエル二世の治世初頭にアルメニアコイ將軍として登場する。おそらく、レオン五世による抜擢であろう（後述）。

さらに、レオン五世治下に皇帝の近親者でグレゴリオス・プロトトスなる人物がテマ將軍であったことがわかっている。<sup>(37)</sup> また、聖人伝史料からの情報ではあるが、やはり皇帝の甥ないし近親者のバルダスという者がトラケシオイ將軍をつとめていたとされる。<sup>(38)</sup> 最後に、ミカエル二世の息子テオフィロス帝の治世に活躍する有名なアルメニア人の將



軍マヌエルもレオン五世を支える一人であつたらしい。彼はかつてアナトリコイ軍団を指揮していたと記録されてい<sup>(39)</sup>る。

以上のように、対外戦争による危機によつて始まつたその治世において、レオン五世は身内の者たち、とりわけ同じアルメニア系の人びとをテマ將軍に拔擢するなど一世紀前のレオン三世とよく似た人事を行つたといえるだろう。

それでは、政府閣僚など首都勢力と呼べる人々についてはどうであつたか。残念ながら史料記述からの情報には限界があり、全容をつかむことは困難である。それでも、ニケフォロス一世の治世以来の重臣で、ミカエル一世政権の中枢にあつたであろうスコライ連隊長のステファノスはこれ以降姿を消しており、引退ないし失脚したと思われる。同じく、かつてニケフォロス一世のクーデタに財務長官として参加したパトリキオス位のテオクテイストスは、その後マギストロス位にのぼつてミカエル一世の即位にかかわつたが、レオンの即位後はカルケドン付近の修道院に入つたことがストウディオス修道院長テオドロスの書簡から判明する。<sup>(40)</sup>以上の二人に加え、政権にかかつてきた総主教ニケフォロスも、皇帝のイコノクラスム政策に反対したため八一五年に解任された。おおむね、政府要人たちは交代したということだろうか。

ただし、異なる事例も確認できる。史料を読むと、要所々々で顔を出すヨハネス・ヘクサブリオスという人物がいる。彼はベルシニキア会戦から帰還したミカエル一世を出迎える城壁長官として登場し、皇帝にアルメニア人レオンに全軍の指揮をゆだねるのは危険だと忠告する。<sup>(41)</sup>けれどもヨハネスはレオン五世の下でも同職にとどまり、ブルガリアのカン・クルムとの交渉に加わつて、密かに暗殺計画をまかされた。<sup>(42)</sup>さらに彼は運輸・外務長官に昇進し、しかもレオン五世殺害後もどうやら政権内にとどまつたらしい。<sup>(43)</sup>

例外であるかもしれないが、このように複数の皇帝の治世を通じて昇進する人物もいるだけに、政権の中味につい

て安易に判断を下すことはできない。緊急事態ともいえるレオン五世即位直後の政権を分析したソフリスは、首都においては高官の交代は一定程度あったにせよ、下位の官僚などについては大幅な入れ替えは実施されなかったと推測している。<sup>(44)</sup>

ブルガリアとの対外関係を除くとレオン五世の治世で注目されるのが、イコノクラスム（聖像破壊）の復活である。彼は後にコンスタンティノープル総主教となるヨハネス（七世グラマティコス…在位八三七頃―四三年）を重用し、八一五年に首都で公会議を開催、かつてコンスタンティノス五世が開いたヒエリア公会議の決定を復活させた。<sup>(45)</sup>確かに、イコノクラスムの復活は修道士たちを中心として聖界に大きな動揺を生じさせたものの、宗教政策の転換がティノスと改名させており、彼がレオン三世やその息子コンスタンティノス五世を意識していたことは確実だと思われる。<sup>(46)</sup>

実際、レオン五世の即位は一世紀前のレオン三世のケースを彷彿とさせるものであった。二人はともにアナトリコイ将軍であったことはすでに述べたとおりであり、首都へのアプローチに東西の違いはあれども、対外上の危機を背景にして現職皇帝の退位を引き出すことに成功している。両政権の類似は、小アジアのテマの将軍に身内を登用している点でも共通する。そして、注目したいのが二人のレオンの死後に同じく大規模な軍事反乱が発生していることである。

## (2) ミカエル二世（在位八二〇―二九年）

すでに触れたように、アモリオン生まれのミカエルはトルコ人バルダネスの配下として頭角をあらわした。ゲネシ

オスの『皇帝列伝』は、ミカエルを見込んだテマ將軍（バルダネスなのだろうか？）は自分の娘を彼に嫁がせたと伝えている。<sup>(47)</sup>

八〇三年、バルダネスを裏切ったミカエルをニケフォロス一世は幕僚長として取り立て、コンスタンティノープルの宮殿を与えた（前述）。その後しばらく彼の経歴は不明となるが、アルメニア人レオンが皇帝に擁立された時、ミカエルはレオンの馬丁長であったようである。<sup>(48)</sup>そして皇帝となったレオンはミカエルにパトリキオス位を授け、エクスタピテス連隊長に任命した。また、レオンはミカエルの息子（おそらく後の皇帝テオフィロス）の洗礼時に代父をつとめたといふ。<sup>(49)</sup>

このようにレオンとミカエルの関係は良好のように見えたが、齒に衣着せず暴言を吐くミカエルを皇帝は気にするようになった。探りを入れるため、彼の言動を逐一報告するように命じられたのが前述の運輸・外務長官ヨハネス・ヘクサブリオスである。そして八二〇年のクリスマス当日、ミカエルが帝位篡奪を計画しているとの情報をつかんだ皇帝は、彼を逮捕し、死刑を言い渡した。けれども、陰謀への加担が露見することを恐れた皇帝側近の者たちは密かに皇帝暗殺を実行し、ミカエルは絶望の淵から権力の頂点へと駆け上がるようになった。史料は、玉座に着いた時の皇帝には鉄の足枷がつけられたままだったと記している。<sup>(50)</sup>

こうして帝位についたミカエル二世であるが、彼の治世冒頭はかつての同僚スラヴ人トマスとの死闘によって占められる。この三年におよぶ大反乱については章をあらためて論じることにした。

三 スラヴ人トマスの乱（八二一—三年）…最後のテマ反乱

「スラヴ人」というあだ名を持つトマスの出自もまたあいまいである。わかっているのは、八〇三年の反乱時にトマスはバルダネスを裏切らなかつたこと、そのためにアッバース朝の領域への追放ないし逃亡を余儀なくされたらしいこと、そして即位したレオン五世がトマスをかつて自分が就任していた官職のフォイデラトイ師団長に任命した<sup>(51)</sup>こと、そして年をとって片足が悪かつたことくらいである<sup>(52)</sup>。

八二〇年から翌年にかけての冬季にトマスは反乱を起こした。それはミカエル二世による篡奪に対するものであるのか、それともトマスはすでにレオンの治世末期に反乱を準備していたのか、はつきりしない。研究者の間で意見は分かれている（後述<sup>(54)</sup>）。

ともかくトマス率いる反乱軍は勢力を拡大し、首都コンスタンティノープルを一年以上にわたって包囲攻撃することになった。小アジアのテマ軍団が関与した反乱は多いが、スラヴ人トマスの乱ほどに注目された反乱はない。それは関連する史料記述がかなりの量残されていることに加え、この反乱が他には見られない特徴を有していたためであった。まずはこの反乱に関する研究史を概観することしよう。

二〇世紀前半にロシア出身のビザンツ学者ワシーリエフは、この反乱が持つ政治・宗教・社会の三つの面での特徴を指摘した<sup>(55)</sup>。これらの要因が存在したがゆえに、トマスの乱は深刻な反乱へと発展したというのである。

政治面でワシーリエフが注目したのは、帝国の主要な軍事力である小アジアのテマ軍団がアルメニアコイとオプシキオンを除いてトマスを支持したことである。史料は、ただミカエル二世の甥でオプシキオンの司令官のカタキユラ

ストアルメニアコイ将軍のオルビアノス（前述）のみが皇帝側についたと記述している。<sup>(56)</sup>

さらに、反乱軍の中には小アジアおよびコーカサス地方の雑多な民族が含まれていた。また、トマスがスラヴ人の血を引いていたため、トラキアやマケドニアにおいて彼と民族を同じくする人々が続々と反乱軍に合流したという。<sup>(57)</sup>

またトマスの乱は、単なるビザンツ帝国の内政問題というだけではなく、東方アッバース朝との対外関係においても見逃せない。アッバース朝への亡命経験のあるトマスは、カリフのマムーン（在位八一三—三三年）との間で皇帝ミカエル二世に対する盟約を結び、さらにアンティオキアの総主教ヨブによって帝冠を受けたという。<sup>(58)</sup>

宗教面においても、反乱は帝国内での激しい論争・対立を浮彫りにしていた。八一五年以来、先帝レオン五世によって再開されたイコノクラスムをミカエル帝が継承したのに対し、どうやらトマスはイコンの擁護者を自認していたらしい。彼は自らをかつてイコンを復活させた皇帝コンスタンティノス六世だと称した。これにより、イコン崇敬派の人々はトマス支持にまわることになった。さらに、反乱軍にはこれまで帝国政府から厳しい迫害を受けてきた小アジアの異端パウロ派<sup>(59)</sup>も加わっていたといわれる。

最後に、この反乱はトマス個人の野心がどのようなものであったにせよ、当時のビザンツ社会に蓄積されていた様々な不満を広範囲にわたって噴出させたといえる。重税にあえいでいた農民、主人の横暴な搾取に苦しんでいた隷属民、そして長期にわたる軍役に嫌気がさしていた兵士たちは、続々とトマスの傘下に集った。つまり、トマスの乱は「社会革命」の性格を帯びた民衆運動であつたらしい。

以上のようなワシーリエフの主張は、前世紀初頭に書かれたビュアリの『東ローマ帝国史』（一九一二年）<sup>(60)</sup>の記述とあわせて、戦後オストロゴルスキーの『ビザンツ国家史』へと受け継がれた。これがトマス反乱についての基本イメージとなつた。オストロゴルスキーは反乱について次のように述べる。<sup>(61)</sup>

「とりわけ重要なのは、反乱の動きが社会革命的な性格を獲得した事実によつてゐる。すなわち、トマスは、貧しい者たちの保護者として、彼らの重荷を軽減することを約束した。こうして彼は、経済的困窮、過度な税負担、そして政府役人による横暴に憤慨した大衆を動員した。それゆえ、あるビザンツ年代記作者は述べてゐる。「奴隷は自分の主人に、兵士は自分の司令官に対して殺害の手をあげた」。

反乱は民族的、宗教的そして社会的対立に乗じて、まもなく小アジアのほぼ全域に広がり、小アジアの六つのテマの中で皇帝に忠誠を示したのは、オプシキオンとアルメニアコンだけであつた。トマスはアンティオキアの総主教によつて皇帝に加冠されたが、これはカリフの承諾なしには起こりえないことである。キビュライオタイ・テマの支援により艦隊を獲得したトマスは、これを用いてヨーロッパへと渡つてヨーロッパ側にいるイコンを支持する住民たちを自分の傘下に集めることが可能となつた。早くも八二一年一二月にコンスタンティノープルの包囲が始まり、それは一年以上にわたつて続いた。しかし結局、反乱勢力はこれによつて破滅した。統制の取れない大衆運動を打ち負かしたのは、コンスタンティノープルの皇帝の戦いにおける優れた統率力であつた。とりわけ、ミカエル二世はブルガリアの칸の支援に助けられた。ちょうど、かつてテルヴェルがレオン三世に味方してアラブ人に対抗したように、今回はビザンツにとつて極めつきの難敵（「クルム」の息子オムルタグがミカエル二世を助けてトマスの反乱に対抗し、その軍隊をけちらした。八二三年春にはトマスは攻囲を解かざるをえなくなり、運動は崩壊した。それでもトマスはわずかな手勢とともにアルカディオポリスにこもつて、ようやく一〇月になつて皇帝軍の手に落ち、残虐な拷問の末に処刑された（中谷訳）。

トマスの乱については、かつてのソビエトのビザンツ学界においても、リーブシツツをはじめとする研究者たちに

よって社会・経済面からその意義が高く評価された。彼女は、トマスの乱はビザンツ封建制の成立過程における転機となったと主張した<sup>(62)</sup>。

しかし、このような通説に対しては厳しい批判がなされた。戦後フランス・ビザンツ史学界の重鎮ルメルルは、「トマス反乱の原動力は民族・宗教・社会的不満」という図式に疑問を投げかけたのである<sup>(63)</sup>。あくまでも史料に忠実に徹底した実証の立場を貫く彼の議論は、従来の学説をことごとく否定するものであった。

ルメルルによる通説批判は、まず史料の検証から始まる。七・八世紀はビザンツ史上で情報の乏しい時代であったが、九世紀に入ると史料はその数・内容ともに次第に充実してくる。九世紀二〇年代に起ったトマスの乱に言及する史料は、主なもので四つあり（すでに取り上げたゲネシオスの『皇帝列伝』と『続テオファネス』に加えて、皇帝ミカエル二世のフランクのルートヴィッヒ敬虔帝あて書簡（ラテン語）<sup>(64)</sup>、そしてとほぼ同時代に執筆された修道士ゲオルギオスの『年代記』<sup>(65)</sup>）、それぞれの比較対照が可能である。

ところが、ゲネシオス『皇帝列伝』と『続テオファネス』を読んでいくと、反乱の前史すなわちトマスの出自や反乱の原因・性格について記述した箇所には、互いに矛盾する二つの異本<sup>(66)</sup>が存在し、しかも史料ごとに別個の異本が採用されているのではなく、二つが同時に併記されるかたちをとっていることが判明する。従来の研究者たちがこの二つの異本からの情報を苦心して統合しようとしたの<sup>(67)</sup>に対して、ルメルルは両異本の事実内容を詳しく検討した結果、一方（彼が「シリア本」と呼ぶヴァージョンA）はほとんど真実を含んでおらず、それは主要史料の一つである「ミカエル二世の書簡」に見られる政治的プロパガンダの焼き直しにすぎないとした。

たとえば「シリア本」では、トマスはイスラームに改宗したのに、他の箇所ではイコン崇拜を擁護したとあったり、反乱軍の主力はイスラーム教徒から構成されていた、といったとても事実とは思えない記述が多く見られる。こ

ここには明らかにトマス個人や叛徒たちへの誹謗中傷が感じられる。反乱鎮圧直後の八二四年に書かれた「ミカエル二世の書簡」において、事件はレオン五世の治世末に始まったと記されているのを、ルメルルは、ミカエルによる自身の即位の妥当性を主張するための事実の改竄と見た。つまり、皇帝は自身のクーデタの正当化のためにトマスの乱を利用したと考えたのである。

これに対して、もう一方の異本「小アジア本」(ヴァージョンB)は、やはり叛徒トマス個人をめぐっては信用できない箇所もかなり見られるものの、史料の前後の記述と整合性が高くて信頼度が高い。よって反乱史は「小アジア本」にしたがって再構成する必要があるというのである。

同様の史料批判は、すでに旧ユーゴスラヴィアの研究者バリシッチによっても主張されていた。<sup>(88)</sup>ただし、旧東ドイツのケプシュタインは、ルメルルは二つの異本をあまりに截然と区別しすぎであると批判し、ミカエル二世のプロバガンダによる記述は実際にはある程度は歴史性のある内容を歪めたものだろうと推測している。<sup>(89)</sup>

少々長くなったが、以上トマスの乱に関する研究史をまとめた。以下では、これまで注目を集めてきたトマスの乱の特長について検討を加えていこう。まず、反乱への異民族の参加について。「ミカエル二世の書簡」には次のようにある。

「そしてこれらを手短に述べると、トマス自身はサラセン人、ペルシア人、イベリア人、アルメニア人、アブハジア人そしてその他の異民族とともに突如ベルシアから出て、このような強力な軍勢で戦いを始め、略奪により全アルメニア公領 (totum Armeniae ducatum)、そして同時にコーカサスの山に住む民族であるカルデア公領 (ducatum Chaldaea) を自らに服属させ、さらにアルメニアコイ将軍 (dux Armeniacorum) をも強力な軍勢によつ



て打ち負かした。」<sup>(70)</sup>

民族の列挙はゲネシオスや『続テオファネス』ではさらに誇張されたかたちとなっていて、インド人、エジプト人、アッシリア人、メディア人、ジキア人、カベイリア人、スラヴ人、フン人、ヴァンダル人、ゲタイ人、マニ教徒（パウロ派異端）、ラズ人、アラン人、カルデア人、アルメニア人、そして「他のあらゆる種の民族」が追加される。<sup>(71)</sup>

記述のこの部分は、ミカエル二世のテマ将兵からの不人氣とトマスの気さくな性格の紹介に続いて、内外の人々が後者を支持したと続く箇所にあたる。アルメニア人やコーカサス諸民族など異民族の参加はあったのだろうが、記述はかなりレトリックの要素が強いだけに強調しすぎるのは危険だろう。皇帝の書簡はテマ軍団として皇帝側のアルメニアコイに言及しているようだが、実際には多くのテマ軍が反乱に加わっていたという点を見逃してはならない。

また、アラブ人との同盟関係についても、トマスの真の狙いは内乱期間中の東方国境の安定にあったようである。つまり、反乱の混乱に乗じてイスラーム軍が帝国内に侵入するのを阻止するため、シリアに進軍して和平を取り結び、アンティオキア総主教から加冠されたと見られる。いずれにしても、反乱軍の主要構成員は書簡から想像されるような寄せ集めの烏合の衆ではなく、ルメルルも主張するように帝国正規軍であったと思われる。

次に宗教面について。「小アジア本」でのトマスがイコン崇敬派であったとか、自らをコンスタンティノス六世と称したという主張もかなり怪しい。なるほど、イコノクラスムに反対する都市が反乱軍側についた例は二、三あるものの、大部分のイコン擁護者たちは動かなかった。イコノクラスム迫害による殉教者を主人公とした当時の聖人伝の多くはトマスを「反逆者」と呼んでいる。<sup>(72)</sup>

また、パウロ派異端の反乱参加についてもはっきりしない点が多い。パウロ派異端者はイコンのみならず十字架へ

の礼拝さえも拒否していたから、万一彼らがトマスの軍中にあつたとするならば、正統派であるイコン崇敬派が反乱を支持する可能性はほとんどなくなる。イコノクラスト皇帝への対抗上、トマスがイコン支持のポーズをとったかも知れないにせよ、そのことが直接反乱の動向を大きく左右させたとは思えないのである。

最後にマルクス主義の歴史家たちが強調する社会・経済的要因はどうか。ルメルルは、これほど大きな反乱が社会・経済上の背景を全く欠いていたはずはないという。けれども、史料記述に忠実であるかぎり、今回の反乱だけに特別重大な社会・経済上の動機を見出だすことはほとんど不可能である。反乱の民衆運動としての性格を示す記述としては、「奴隷は主人に、兵士は上官に、そして将校は指令官に対し殺害の手をあげた」といった具体性を欠く表現だけしか残っていない。しかし、実際には多くの小アジアのテマ軍団が一致してトマスを支援したのだから、この言い回しは反乱による混乱の大きさを表現するためのレトリックであろう。ルメルルは、反乱における社会・経済上の要因を過大評価することを戒める。

こうして、トマスの乱は民族・宗教・社会上の不満に深く根ざしていた、との通説は一掃された。かわつてルメルルが採用したのは、かつての同僚で恩人でもある先帝レオン五世を殺害して帝位についたミカエル二世に対しトマスは甲い合戦をいどんだというものである。結局、彼の結論はトマスの乱をビザンツ史上の他の多くの反乱と同列にあつかう平凡なものであつた。

とはいえ、ルメルルの主張は徹底した史料考証に裏打ちされているだけに、簡単に退けるわけにはゆかない。ソビエトのビザンツ学者カジューダーンによる批判もあまり有効とは思えないし、先に挙げたケプシュタインの論考もルメルル説の論駁というよりはむしろ彼の考察を受けた上での議論の深化を目指したものと見える。

ここで注目したいのは、この反乱が持っていた独自性ではなく同時代に発生した他の反乱との類似性である。トマ

スの乱は八世紀初頭からの一連の軍事反乱の最終段階に当たっていた。けれども、従来の研究はこの反乱の独自性を強調するあまり、それに先立つ多くの反乱の存在との関連を無視する傾向が強かったのである。

私は八世紀から九世紀初頭にかけてを「テマ反乱の時代」ととらえ、さらに「テマ反乱」について定義づけを試みた。<sup>(74)</sup>すなわち、小アジアを中心とする複数のテマ軍団が現政権に対抗し、自分たちの皇帝候補者を推戴しつつ首都に向けて進軍する軍事反乱である。スラヴ人トマスの乱は、彼の野心や宗教上の立場、合流した人々の構成がどうであれ、このような「テマ反乱」のひとつであったことはまちがいない。

トマスの乱がどうしてこのような大反乱に発展したのかについても、彼が多くのテマ軍団の支持を獲得できたことにそのおもな理由を求める必要があるように思う。この反乱の約十年前のレオン五世の即位時にもテマ軍団による擁立はあったが、それは帝国軍がブルガリア軍に連続して大敗するという非常時での出来事であっただけに、むしろ二十年前のニケフォロス一世に対するトルコ人バルダネスの乱との類似が想起される。

いずれにせよ、九世紀の「テマ反乱」においてその中心にはいつもアナトリコイ軍団があった。トルコ人バルダネスはアナトリコイ将軍であったし、アルメニア人レオンもこのテマ領内の出身であり、皇帝位を獲得したときは同じくアナトリコイ将軍として帝国軍を指揮していた。そしてスラヴ人トマスもまたレオン五世によってアナトリコイ軍団のナンバー二、かつてレオンも就任したフォイデラトイ師団長に抜擢された。おそらく、蜂起時に彼はこの職にあって、それゆえアナトリコイを中心に多くのテマ軍団の支援を獲得できたと推測される。<sup>(75)</sup>

一方、レオン五世を殺害して皇帝となったミカエル二世の出世の仕方は少々異なっている。アモリオン生まれでアナトリコイ将軍のトルコ人バルダネスに仕えた点はレオンやトマスと類似しているものの、皇帝ニケフォロス一世に寝返った後は、おそらく皇帝の近臣として幕僚長をつとめ、その後はアルメニア人レオンの馬丁長、そして彼が帝位

につくとエクスクビテス近衛連隊長となった。つまり、どちらかというとは彼は首都を中心とした軍歴を歩いたのであり、実際に首都におけるクーデタによって帝位を篡奪した。確証はないものの、ミカエルのこのような経歴とアナトリコイの将兵に不人気であったとの史料記述には何らかの関連性があるのかもしれない。

スラヴ人トマスの乱で興味深い事実の小アジアのテマ軍団の対立の構図がある。すなわち、皇帝ミカエル二世側で戦ったのがアルメニアコイとオプシキオン軍団であり、これ以外のアナトリコイ・トラケシオイ・ブケラリオイ・キビュライオタイが反乱者側で戦った。これは約一世紀前の大規模な「テマ反乱」アルタバストスの乱と同じ構図となっている（ただしブケラリオイは成立前）。首都を守るアルタバストスをアルメニアコイとオプシキオンが支援し、皇帝コンスタンティノス五世はキビュライオタイを含めアナトリコイとトラケシオイの軍隊を味方につけた。

ただし、構図はそっくりであるが、イコノクラスム推進側とそれに対抗する（イコン崇敬派の可能性のある）グループの構成は逆転している。このことから、イコノクラスムと小アジアのテマ軍団の動向を関連づけることにあまり意味がないことは明らかである。<sup>(76)</sup> これまで筆者が「テマ反乱」を考察する上でイコノクラスムをめぐる動向をあまり詳しく論じてこなかった理由がここにある。

また、構図は似ているが、結果もまったく逆となった。アルタバストスの乱では、勝利したのは首都を兵糧攻めにしたコンスタンティノス五世の側であり、ビザンツ史上ではめずらしくコンスタンティノープルにこもる勢力が敗退した。一方、トマスの乱では首都攻撃は一年以上におよんだものの成功せず、最後に籠城のうえ敗退したのはアルカディオポリスにこもるトマスの方であった。

次に、トマスによる反乱にかかわった人物について補足しておく。皇帝側では、マギストロスのクリストフォロスが彼の息子のバルサキオスとナサル（ともにパトリキオス位）とともに言及される（ただし反乱における具体的行動

は不明<sup>(77)</sup>。トマス側では、皇帝の寵愛を失った元將軍のグレゴリオス・プテロトス（前述）が逃亡先のキクラデス諸島方面から到来して反亂軍に合流しているが、彼はレオン五世の親戚であった<sup>(78)</sup>。さらに、トマスが養子に迎え、軍隊をあずけたコンスタンティオスがアルメニアコイ軍団との戦いで敗死すると、トマスは別のアナスタシオスなる人物を養子として首都攻撃に着手した<sup>(79)</sup>。

トマスの乱の発生時期の問題についても考えておきたい。通説ではトマスはミカエル二世に対抗して蜂起したとなる。これは「テマ反亂」の観点からは、帝国中央での政治動向に対して小アジアのテマ軍団が反抗する、という点でその他の反亂の場合と整合する。私はルメルルやホルドンらとともにこちらを支持したい。

他方、もしも反亂がすでにレオン五世治下で発生していた、とすればどのように考えられるだろうか。この場合、小アジアのテマ軍団の多くがかつて自分たちが擁立した皇帝に対して蜂起したことになる。なぜトマスの反亂に同調したのか理由は明かとはならないが、小アジアのテマ軍団の將兵たちはレオンの政治に何か強い不満を持っていたという仮説が成立する。つまり、身内のテマ將軍たちを抜擢レイコノクラスムを展開するなど、レオン三世に似た政策を遂行したように見えるにもかかわらず、レオン五世は七年ほどで將兵たちからの信認を失ったことになる<sup>(80)</sup>。こちらの仮説を採用しても、「小アジアのテマ軍団に支えられた政權」への復帰は実現しなかったのである。

最後に、トマスの乱は単なる大規模な軍事反亂にすぎなかったのか、それとも当時のビザンツ社会に存在した不満が噴出した出来事だったのか、という問題がある。残念ながら、史料情報の制約もあって現状ではこの問題に明確な判定を下すことはできない。けれども、トマスの乱にせよ、他のものにせよ、反亂が何らかの民衆運動の要素を含んでいたとしても、それは軍事力を伴った媒介者Ⅱテマ軍団を通じて地方の不満という形で噴出する可能性が高かったといえるだろう。

実際、反乱に参加したテマ兵士の大半は一定の土地を持つ農民階層の出身であったはずである。<sup>(81)</sup> トマスは首都に運ばれるはずの租税を差し押さえ、自軍にばらまいたと伝えられる。<sup>(82)</sup> これに対し皇帝ミカエルの方は、アルメニアコイ・オプシキオン両テマを味方につけるため、これらのテマの住民に租税の一部免除を約束した。<sup>(83)</sup> ともかく、トマスの乱の支持母体を狭く軍隊や異民族にのみに限定することはできない可能性は残る。そして、反乱参加者に対する処罰が比較的寛大なものであったことも付け加えておく。

## おわりに

もう一度、九世紀初頭におけるビザンツ帝国の政治状況を概観しておこう。

八〇二年にクーデタによって帝位についたニケフォロス一世は、税務長官をつとめた人物であり、首都の政府閣僚や近衛連隊タグマの支持を受けていた。これはニケフォロス帝の戦死後に帝位を継承した彼の娘婿ミカエル一世についてもあてはまる。さらに、かつてのトマスの同僚であるミカエル二世も首都勢力との結びつきが強い人物だったようである。アモリオンのミカエルはバルダネス反乱の際に皇帝側に寝返り、おそらく皇帝の幕僚長に任命されたの<sup>(84)</sup> 続いて、同僚のレオン五世が皇帝となると近衛連隊エクスクピテスの司令官に抜擢された。<sup>(85)</sup> 彼が八二〇年末に帝位につけたのも、政府内の彼の支持者たちが皇帝レオンを暗殺し、クーデタを成功させたからである。

以上に見られるのは、大まかではあるが図式化すると、①首都高官／官僚／近衛連隊（首都勢力の支持）↓②陰謀・クーデタ↓③皇帝位篡奪／継承、というパターンAである。

このような政権の継承や交代のかたちはビザンツ帝国の歴史において珍しいものではない。ビザンツの政治は首都

内の、とりわけ宮廷内での主導権争いを通じて動くことが多く、この傾向は首都の外部からの圧力を受けて政権が事実上篡奪された場合であっても確認できる。七世紀の前半のフォカス帝の篡奪や彼を打倒したヘラクレイオス帝のケースでは、主導権を握った勢力がいずれにあったにせよ、首都の政府関係者に加えてサーカス党派を含む首都民衆も無視できない動きを示した。六四一年、ヘラクレイオス帝の孫であるコンスタンヌス二世の即位を最後に支えたのも首都民衆と元老院であった。<sup>(86)</sup>

七世紀後半になると軍事反乱が多発化し、軍隊の発言力が増していった。「混乱の二〇年」においては、遠征艦隊などを除くなら帝位篡奪に際して主導権を発揮したのは首都勢力のひとつと見なしうるオプシキオン軍団であった。ただし、この時期においても六九五年のレオンティオスの蜂起による篡奪や七一三年の政府役人であるアナスタシオス二世の擁立など首都での動向が重要性を持っていたように見えるが、史料に首都の民衆が登場するケースはしだいに少なくなっていた。<sup>(87)</sup>

レオン三世の即位以後になると、そもそも首都勢力の政治上の活動がほとんど見られなくなる。それが再び活発化するには半世紀以上後のエイレネ摂政期を待つ必要があった。<sup>(88)</sup> 九世紀初頭における皇帝擁立をめぐる首都勢力の積極性の回復は、以上のような流れを受けた動きであった。ただし、そこに首都民衆の活躍の姿はまったくいいほど見出せなくなっていた。

八世紀末からの首都勢力の回復、その主導による政権の継承・交代という動きに対しては、小アジアのテマ軍団から異議申し立てがそのつど発生した。それは、筆者が定義する「テマ反乱」というかたちをとっており、皇帝位をめぐる争いは前述のパターンAとは別の形態で展開された。すなわち、九世紀初頭の三つのテマ反乱には①アナトリコイ将軍／フォイデラトイ師団長（小アジアのテマ軍団の支持）↓②軍事反乱↓③皇帝位篡奪／失敗、というパターン

Bが見て取れるのである。なお、七九〇年のテマ反乱ではアルメニアコイ軍団がリーダーシップを発揮した。<sup>(89)</sup>

まとめると、Aパターンでは首都⇨中央に支持基盤を置くニケフォロス一世・ミカエル一世・ミカエル二世という形態、もうひとつのBパターンではバルダネス・レオン五世・トマスというアナトリコイを中心としたテマ軍団⇨地方に支えられた勢力（軍事反乱）、という図式である。以上、単純化しすぎのきらいはあるものの、九世紀初頭は政治面では皇帝擁立をめぐる中央と地方との「鏝ぜり合い」と呼べるような時期と見なすことができると思う。

以上のような政治の流れを概観した時、八世紀末から九世紀二〇年代前半にかけて帝位の交代が六回くりかされていくのがわかる。これを一世紀前の「混乱の二〇年」と比べてみると次のようになる（丸の番号は成功した反乱・陰謀、×は不成功）。

「混乱の二〇年」（六九五―七一七年）

- ①レオンティオス（篡奪／首都騒乱）
- ②ティベリオス三世（篡奪／軍事反乱）
- ③ユステイニアノス二世重祚（篡奪）
- ④フィリッピコス（篡奪／軍事反乱）
- ⑤アナスタシオス二世（篡奪／首都陰謀）
- ⑥テオドシオス三世（篡奪／軍事反乱）
- ⑦レオン三世（篡奪／テマ反乱）
- ・テマ・シチリア（× 反乱）

テマ反乱多発化の三〇年（七九〇―八二三年）

- ①コンスタンティノス六世（親政／テマ反乱）
- ②エイレネ女帝（篡奪／首都陰謀）<sup>(90)</sup>
- ③ニケフォロス一世（篡奪／首都陰謀）
  - ・トルコ人バルダネス（× 〃テマ反乱）
  - ・アルサベル（× 〃首都陰謀）
  - ・スタウラキオス（継承／共同皇帝）
- ④ミカエル一世（篡奪／首都陰謀）
- ⑤レオン五世（篡奪／テマ反乱）



・アルテミオス（× 再登極計画）

⑥ミカエル二世（篡奪／首都陰謀）

・テマ・ヘラスなど（× 反乱）

・スラヴ人トマス（× / テマ反乱）

傾向としては、後者では武力による篡奪のケースが減少している。つまり軍事反乱の不成功が目立ち、陰謀やクーデタなど政治が首都コンスタンティノープルを中心に展開されるようになってきているように見える。一方で、テマ反乱の多発化、つまりテマの勢力がアナトリコイを中心に皇帝擁立・反乱をくりかえしていることも注目される。その原因とは何か。すでに述べたことのくりかえしになるが、八世紀末以来の首都コンスタンティノープルの勢力、具体的には首都高官やその下にある官僚たち、そして軍事面では皇帝に直属する近衛連隊タグマの整備とその影響力の拡大が挙げられるだろう。新しい中央勢力の成長は、従来のような地方のテマを中心とした皇帝の推戴という事態の展開を阻みつつあったのである。軍隊が帝権樹立において主導権を発揮する時代は終焉を迎えつつあった。

八二三年、三年にわたるスラヴ人トマスの大反乱は皇帝ミカエルの軍隊によって鎮圧され、トマスは拷問の末処刑された。ここに八世紀初頭以来くりかえされてきた「テマ反乱の時代」は事実上の終焉をむかえる。「混乱の二〇年」をへてレオン三世によって構築された小アジアのテマ軍団が下支えするかたちでの軍事色の強い政権は、九世紀初頭のレオン五世によって再度設定が試みられたかもしれないが、長続きすることはなかった。八世紀末のエイレネ政権以後、ゆらぎが生じてきた「小アジアのテマ軍団に支えられた政権」という政治構図はここに姿を消すことになったのである。

- 注 (1) A. Lesmüller-Werner & H. Thurn (eds.), *Josephi Genesisi Regum libri quattuor*, Berlin/New York, 1978, (以下 *Genesis* と略記) 1.6.34-36, p.7. 本史料の翻訳には次のものがあゆ。Lesmüller-Werner (tr.), *Byzanz am Vorabend neuer Grösse. Überwindung des Bilderstreites und der innenpolitischen Schwäche (813-886)*. Die vier Bücher der Kaisergeschichte des Joseph Genesis, Wien, 1989; A. Kallellis (tr.), *Genesis on the Reigns of the Emperors*, Camberra, 1998.
- (2) 同内容の伝説記述が『続テオファネス』にもある (I. Bekker (ed.), *Theophanes Continuatus*, Bonn, 1838, 12, (以下 *Theophanes Continuatus* と略記) pp.7-8)。
- (3) C. de Boor (ed.), *Theophanis Chronographia*, vol.1, Leipzig, 1883 (以下 *Theophanes* と略記), p.470.29-30 AM 6288.
- (4) *Theophanes*, p.474.9 AM 6291.
- (5) P. A. Hollingsworth, in Alexander Kazhdan et al. (eds.), *Oxford Dictionary of Byzantium*, 3 vols., (以下 *ODB* と略記) vol.1, p.255 BARDANES TOURKOS, なお、ターナーはこのバルダネスの「トルコ人(トウルコス)」としようのはあだ名ではなく名字だと考え、彼との血縁関係を関連史料から推測しつつ、レオン五世・ミカエル二世らを含む九世紀初頭の政治をアルメニア系人脈から説明しようとして試みた (D. Turner, *The Origins and Accession of Leo V (813-820)*, *Jahrbuch der Österreichischen Byzantinistik* 40, 1990, pp.171-203)。興味深い考察ではあるものの、ターナーの主張は推測の部分も多いため本稿では関連する議論のみを個別に取り上げる。
- (6) *Theophanes*, p.479.14-15 AM 6295.
- (7) *Theophanes Continuatus*, 1.1, p.6.14-16; 1.3, p.8.15-16; cf. 1.3-4, pp.8-10. 海のテーマであるキビュライオタイの動向は不明である。cf. *Genesis*, 1.7, pp.7-8.
- (8) テマ反乱の定義については、拙稿「(研究ノート) テマ反乱についての覚え書き」(『関学西洋史論集』三五号、二〇一二年、六三―七四頁)の六七―六八頁を参照。
- (9) この反乱について関連する他史料として、J. Duffy and J. Parker (ed./tr.), *The Synodicon Vetus*, Washington DC., 1979, c.153; J. Gouillard, *La vie d'Euthyme de Sardes (+831)*. Une oeuvre du patriarche Méthode, *Travaux et Mémoires* 10, 1987, pp.1-101, p.5がある。前者は、簡潔ながら反乱がエイレネを支持するものであったとし、さらに反乱軍との交渉において元コンスタンティノーブル大教会のオイコノモスのヨセフが仲介者となった、と伝えている。彼については拙稿

- 「ストアツディオスのテオオテロスと『發通論争』」『西洋史学』一八六、一九九七年、一一一九頁の第一・三章を参照。なお、本反乱についての本條を引く。 S. Maurotate - Kaisougiannopoulou, Η έπιρωσότωση του Βαρδόαη Τουρκου οτίς σύγχρονής και μετοχέγεστρης αθηγημετρικής τηγές, Βυζαντινώ 10, 1980, pp.217-236 ; E. Kountoura-Galakē, Η έπιρωσότωση του Βαρδόαη Τουρκου, Σύμμεκτα 5, 1983, pp.203-217, p.208 ; J. B. Bury, *History of the Eastern Roman Empire, from the Fall of Irene to the Accession of Basil I (802-867)*, London, 1912, pp.10-13 ; W. T. Treadgold, *The Byzantine Revival, 780-842*, Stanford, 1988, pp.131-2<sup>46-48</sup>。
- (10) L. Burtaker & J. Haldon, *Byzantium in the Iconoclast Era, c.680-850 : a History*, Cambridge, 2011, p.635.
- (11) *Theophanes*, p.480,6-7 AM 6295.
- (12) *Genesis*, 18, p.8,52-54 ; *Theophanes Continuatus*, 1,3, p.9,9-12.
- (13) N. Oikonomides, (ed./tr.), *Les listes de préséance byzantines des IX<sup>e</sup> et X<sup>e</sup> siècles*, Paris, 1972, pp.55, 149, 341, cf. J. B. Bury, *Byzantine Imperial Administration System*, London, 1911, p.43 ; W. Treadgold, Notes on the Numbers and Organization of the Ninth-Century Byzantine Army, *Greek Roman and Byzantine Studies* 21, 1980, esp. pp.272, 279-284.
- (14) Kazhdan, *ODB*, vol.II, p.1139 KOMES TES KORTES ; Bury, *Imperial Administrative System*, p.43 ; idem, *A History of the Eastern Roman Empire*, p.12 n.3 ; Oikonomides, *Les listes de préséance byzantines*, p.59,3 ; p.61,25 (komētes tēs kortēs tōn thematōn) ; cf. p.341.
- (15) *Theophanes*, p.479,25-32 AM 6295 ; *Theophanes Continuatus*, 1,3, pp.9-10.
- (16) *Theophanes*, p.480,1-3 AM 6295.
- (17) *Theophanes*, p.480,19-21 (引用), 15-24 AM 6296 (コウビヤシニルタニホソム条記)。cf. *Genesis*, 17, p.8,47 ; *Theophanes Continuatus*, 1,3, p.10,4-5.
- (18) C. Mango & R. Scott, *Chronicle of Theophanes Confessor : Byzantium and Near Eastern History, AD 284-813*, Oxford, 1997, p.660 n.2.
- (19) Haldon, *Byzantine Praetorians*, Bonn, 1984, pp.246-251.
- (20) 最新の研究で J・シニエスリコトニエルは、フォイデラトイは外国人による部隊であり、その指揮者も「外国人系」

の人物が任命されたのかかなり大胆な推論を展開している。J. Stiges Codoñer, *The Emperor Theophilos and the East*, 829–842. *Court and Frontier in Byzantium during the Last Phase of Iconoclasm*, Farnham, Surrey & Burlington, VT., 2014, pp.33–40.

- (21) 九世紀後半に政権をクーデタで奪い、マケドニア朝の開祖となったバシレイオス一世の場合もまた、そのような出世パターンが見られる (cf. I. Ševčenko(ed. tr.), *Chronographiae Quae Theophanis Continuati Nomen Ferunt Liber Quo Vita Basilii Imperatoris Amplectitur*, Berlin / New York, 2011; 渡辺金一『コンスタンティノープル千年』第六章)。なお、拙稿『ビザンツ政治史考——九世紀アモリア朝について——』（『愛媛大学教育学部紀要』三〇—、一九九七年）の九五—九六頁も参照。

- (22) *Genesis*, II.4, p.26.75–76; I. Bekker (ed.), *Scriptor Incertus de Leone Armenio*, in idem (ed.), *Leonis Grammatici Chronographia*, Bonn, 1842 (以下 *Scriptor Incertus* と略記), p.336.10; p.340.9. このアルメニア人でパトリキオス位のバルダスという人物に関連して、『テオファネス年代記』は七九二年のマルケッライ会戦で戦死したパトリキオス位のバルダスなる人物に言及しており (*Theophanes*, p.468.2 AM 6284) マンコは彼を七八〇年に陰謀加担で失脚した元アルメニアコイ将軍と同定している (Mango & Scott, *The Chronicle of Theophanes Confessor*, p.616 n.2; p.628 n.5)。ターナーはこの元アルメニアコイ将軍がレオンの父である可能性を示唆する (Turner, *The Origins and Accession of Leo V*, p.173 n.10)。

- やうにマンコは、レオンをトルコ人バルダネスの親類と推測する一方 (C. Mango, *The Two Lives of St. Ioannikios and the Bulgarians*, *Harvard Ukrainian Studies* 7, 1983 (=C. Mango & O. Pritsak (eds.), *Okanos: Essays presented to Ihor Ševchenko*, pp.393–404, esp. p.400 n.17), ターナーはレオンをバルダネスの甥と推測する (Turner, *The Origins and Accession of Leo V*, p.177)。トマン五世<sup>10</sup>については Theodoros K. Korres, *Άγιος Εὐφρόνιος ὁ Αφελύσιος καὶ ἡ ἐποχή του: μετὰ κπλοῦν δεκαετία γὰρ το Βούζαντο (811–820)*, Thessalonike, 1996, pp.32–45, 47–52 も参照。
- (23) *Theophanes*, p.489.17–21 AM 6303. cf. *Theophanes Continuatus*, I.4, p.11. ただ、ターナーはこのアルメニアコイ将軍のレオンとバルダネスの従者であったアルメニア人レオン (後の五世) は別人だとする (Turner, *The Origins and Accession of Leo V*, p.179)。テマ師団長から将軍に昇進するレオンについて、安易な人物同定には慎重である必要があるもの

- ターナーの主張もそれほど大きな説得力を持つものではない。
- (24) 追放されたと思われる (*Theophanes Continuatus*, 14, pp.11-12; *Scriptor Incertus*, p.336)。一方、ターナーが採用する追放理由は、将軍としての失策ではなく、八〇八年に発生した財務長官のアルサベルの陰謀事件に際し、レオンの妻がアルサベルの娘テオドシアであったため、これに連座した、というものである (Turner, *The Origins and Accession of Leo V*, pp.179-180)。
- (25) *Theophanes*, p.497.6-9 AM 6304. ゲネシオスでは、レオンはミカエル一世によりアナトリコイの「臨時将軍 (ヒュボストラテューコス)」に任じられたこと (Genesis, 1.8, p.8.56), 「第一番目のテーマを統べる者」とも呼ばれている (*ibid.*, 1.3, p.5.50)。追放から呼び戻しについては、*Theophanes Continuatus*, 14, p.12; *Scriptor Incertus*, p.336。なおターナーは、皇帝ミカエル一世の父テオフィラクトス・ランガベとレオンの父と目されるバルタスがともに七八〇年の陰謀事件に連座しており、両家の結びつきを指摘する (Turner, *The Origins and Accession of Leo V*, p.180)。
- (26) 八一三年のトラキアへの出陣とブルシニキア会戦についての詳しくは、P. Sophoulis, *Byzantine and Bulgaria*, 775-831, Leiden / Boston, 2012, pp.234-243。
- (27) *Theophanes*, p.502.6, 16-17 AM 6305. 遡巡するレオンにアモリオンのミカエルが皇帝位を受け入れねば殺すと迫ったとすべ。cf. Genesis, 1.2, p.4.38-42; *Theophanes Continuatus*, 1.7, p.17.1-4.
- (28) *Theophanes*, p.502.22-25 AM 6305; C. de Boor (ed.), *Georgii Monachi Chronicon*, vol. II, Leipzig, 1904, p.776; *Scriptor Incertus*, p.340. cf. Mango & Scott, *The Chronicle of Theophanes Confessor*, p.688 n.30. ヴプドセンでの皇帝歡呼は二世紀よりである。
- (29) 他史料では首都南西の黄金門から入場したとある (*Theophanes Continuatus*, 1.9, p.18.18; Genesis, 1.4, p.5.70)。cf. M. McCormick, *Eternal Victory*, p.209.
- (30) *Theophanes*, p.502.25-26 AM 6305. レオンの皇帝宣言を聞いてミカエル一世と妻プロコピア、そして子供たちは修道院に入った。その後、彼の息子たちは去勢される。
- (31) Turner, *The Origins and Accession of Leo V*, pp.196-7.
- (32) *Scriptor Incertus*, pp.342-4. cf. Sophoulis, *Byzantium and Bulgaria*, pp.252-4.

- (33) *Theophanes*, p.503 AM 6305 (アドリアノープルの陥落まで記述)。
- (34) カルム死後のビザンツ・ブルガリア関係については、Sophoulis, *Byzantine and Bulgaria*, pp.265-286が詳しく。
- (35) *Genesis*, I.11, p.9.95-96(トマス拔擢)； pp.9.1-10.1-2(『カヘル昇進』)； I.17, p.17.44-46(同く近衛連隊長)； *Theophanes Continuatus* I.12, p.24.1-2 (トマス拔擢)。
- (36) *Theophanes*, p.501 AM 6305 (ブレゾニア將軍)； *Scriptor Incertus*, p.337.18-19 (セルシニキヤ会戦前のヨハネス・アブラケス)； p.338.13-15 (彼の戦死)。ソプリスは印章史料や逸名作者の記述 (*Scriptor Incertus*) から、ヨハネス・アブラケスは明らかにトラキアとマケドニアの単独將軍だとする (Sophoulis, *Byzantium and Bulgaria*, pp.98, 235, 237, 258)。cf. J. Nesbitt & N. Oikonomides, *Catalogue of Byzantine Seals at Dumbarton Oaks and the Museum of Art*, vol. I, Washington, DC, 1991, p.43.31。
- (37) *Genesis*, II.5, pp.27.22-23-31； *Theophanes Continuatus*, II.14, p.57.19； p.58.14； II.16, p.62.19； p.63.18. 彼はキタラデス諸島のスキュロス島に追放されていたが、トマスの反乱軍に合流して、その後戦死した。
- (38) C. de Boor (ed.), *Vita Nicephori archiepiscopi Constantiopolitani*, in idem (ed.), *Nicephori Archiepiscopi Constantiopolitani Opuscula Historica*, Leipzig, 1880, p.201.8-29； *Vita Theodori praepositi Studitarum*, in PG, vol. XCIX, cols. 204 B-205 C； *ibid.*, cols. 300 C-1 C。
- (39) *Theophanes Continuatus*, III.19, p.110.3-5 (アナトリコイ指揮)°。cf. *ibid.*, I.12, p.24.2-4 (アルメニア人の將軍)； IV.1, p.148.13 (アルメニア人でテオフォイロス即位時にマギストロス)； IV.1, p.149.5-6 (アルメニアコイの指揮者)； *Genesis*, III.2, p.36.1-2 (テオフォロス即位時に対アラブ戦に拔擢)。將軍マヌエルについては Siges Codóner, *The Emperor Theophilus and the East*, 829-842 の第五章を参照°。
- (40) *Theophanes*, p.476 AM 6295 (ニタフォロス一世擁立)； pp.492-3 AM 6303 (『カヘル一世擁立』)； p.500 AM 6305 (『マヘル一世を輔佐』)； G. Fatouros (ed.), *Theodori Studitae Epistulae*, 2 vols, Berlin, 1992, vol. II, nos. 86, 293, 400, 478, 521. cf. P. Sophoulis, *Byzantium and Bulgaria*, 775-831, p.246； S. Efthymiadis, Notes on the Correspondence of Theodore the Studite, *Revue des études Byzantines* 53, 1995, pp.141-163, esp. pp.157-8。
- (41) *Genesis*, I.3, pp.4.45-5.55 (マヌエンヌはエタサブリオン)。

- (42) *Scriptor Incertus*, p.343-4.
- (43) *Genesis*, I.17, pp.15-16; *Theophanes Continuatus*, I.8, p.17.6-12 (『カエール一世への忠告』); *Genesis*, I.17, p.15.61, 68; *Theophanes Continuatus*, I.21, p.34.12-20 (レオン五世の腹心); *Genesis*, II.1, p.22.54-55 (『カエール二世の足枷をはずす』); *Genesis*, II.8, p.31.54-59; *Theophanes Continuatus*, II.19, p.69.16-22 (スラヴ人トマスを前にしての皇帝への忠告).
- (44) *Sophoulis, Byzantine and Bulgaria*, p.246.
- (45) *Burbaker & Haldon, Byzantium in the Iconoclast Era, c.680-850: a History*, pp.366-385.
- (46) *Genesis*, I. 21, p.19.92-93; *Theophanes Continuatus*, II.1, p.41.2-3.
- (47) *Genesis*, II.1, pp.22-23; *Theophanes Continuatus*, II.5, pp.44-45, かつらが、このではミカエルとともに明らかにアルメニア人レオンと見られる人物も将軍の娘を嫁にしたことになっている。しかしレオンは陰謀者であるアルサベルの娘テオドニアと結婚しており (*Genesis*, I.18, p.16.82; *Theophanes Continuatus*, I.21, p.35.7) これらの伝説的逸話を重視しなくては危険である。
- (48) *Genesis*, I.4, p.5.80, cf. *Kaldellis (tr.), Genesis on the Reigns of the Emperors*, p.8 n.21.
- (49) *Genesis*, I.11, p.10.2; *Theophanes Continuatus*, I.12, p.23.22, なお、シニエスニコドニエルは『続テオファネス』の記述 (*Theophanes Continuatus*, I.21, p.33.22) から、ミカエルはフォイテラトイのトゥルマルケス職に就任していたと推測するが、状況から判断するにあまり説得力はない (Signes Codóner, *The Emperor Theophilus and the East*, 829-842, pp.35-37)。
- (50) *Genesis*, II.1, p.22.3; *Theophanes Continuatus*, II.2, p.41.9, 皇帝の足枷の鍵のありかを知らせたのがヨハネス・ヘクサブルイオスであった。このクーデタにまつには *Bury, A History of the Eastern Roman Empire*, pp.49-54; *Treadgold, Byzantine Revival*, pp.224-5; B. Lewis, *An Arabic Account of a Byzantine Palace Revolution, Byzantium 14, 1939*, pp.383-386。ただし、残念ながら陰謀関係者の名前はない。
- (51) トマスの出自については *Hollingsworth & Kazhdan, ODB*, vol.III, p.2079 THOMAS THE SLAV。ケネシオスは、彼を黒海沿岸の Gazoura (Gazourou 湖である) 出身のマルメニア人である (*Genesis*, I.6, p.7.14; cf. *Theophanes Continuatus*,

- II.1, p.73-4). 「スキタイ系(つまりバルカン方面の蛮族出身、スラヴ人を含む)」とも記している (*Genesis*, II.2, p.23.89)。一方『続テオファネス』は彼を小アジアに移住したスラヴ人の子孫としており (*Theophanes Continuatus*, II.10, p.50.20-21) 研究史<sup>65)</sup>はむしろが事実に近いとされる。cf. Helga Köpstein, *Zur Erhebung des Thomas*, *Studien zum 8. und 9. Jahrhundert in Byzanz*, in H. Köpstein & Friedhelm Winkelmann (eds.), *Studien zum 8. und 9. Jahrhundert in Byzanz* (Berliner Byzantinische Arbeiten 51), Berlin, 1983, pp.61-87, 65-67.
- (52) *Genesis*, I.11, p.9.95-1; *Theophanes Continuatus*, I.12, p.24.1-2.
- (53) *Genesis*, II.2, p.23. 史料は「カエルについては、その教養のなさや粗暴さとあわせて、彼は兵士たちに嫌われていたとする一方、トマスは快活な好人物だったと記している。さらに、トマスの年齢はレオン五世と同じくらいだとも述べる (*ibid.*)。ちなみに、トマスの出自は単しかったと史料にあるものの、これは皇帝ミカエル二世側からの誹謗による可能性がある。cf. Köpstein, *Zur Erhebung des Thomas*, p.67.
- (54) *Genesis*, II.2, p.23.80-81 (反「カエル」); II.4, p.26.75 (発生時はレオン治下); *Theophanes Continuatus*, II.11, p.52.12-16 (レオン殺害後の発生)。蜂起がレオン五世の治世に起こったと主張するのは、D. Afimogenov, *The Date of Georgios Monachos Reconsidered*, *Byzantinische Zeitschrift* 92, 1999, pp.437-47, 446-7; idem, *The Conspiracy of Michael Traulos and the Assassination of Leo V: History and Fiction*, *Dunbarton Oaks Papers* 55, 2001, pp.329-338; Signes Codoner, *The Emperor Theophilos and the East*, 829-842, pp.40-45。一方、ホルメンはナブシユタインらに賛成して「反乱のレオン治下での発生はありさうにならぬと主張する (Brubaker & Haldon, *Byzantium in the Iconoclast Era*, c.680-850: *a History*, p.387)。
- シニエスニコドニエルは「スラヴ人トマスの乱を、内乱というよりは帝国国外からの侵攻により始まったものと考える。より詳しくは以下の注(57)を参照のこと」。
- (55) A. A. Vasiliev, *Byzance et les Arabes*, tome I: *La dynastie d'Amorium* (820-867), Brussel, 1935, pp.22-49; idem, *History of the Byzantine Empire 324-1453*, Madison, 1952, pp.274-6.
- (56) *Genesis*, II.2, p.23.4-6; *Theophanes Continuatus*, II.11, pp.53-54.
- (57) A. Werninghoff (ed.), *MGH*, *Legum sectio III: Concilia tome II, pars 2*, Hannover/Leipzig, 1908, pp.475-480, esp.477.10-



- 12 (*マカドニ二世の書簡* (巻末))。
- (58) *Genesis*, II.2, pp.24.16–17; *Theophanes Continuatus*, II.12, p.55.2–3 (空欄をヤコブと見做す)。
- (59) cf. N. Garsoïan, *ODB*, vol.III, p.1606 PAVLIANS.
- (60) J. V. Bury, *A History of the Eastern Roman Empire*, pp.84–119; idem, The Identity of Thomas the Slavonian, *Byzantinische Zeitschrift* 1, 1892, pp.55–60.
- (61) Georg Ostrogorsky, *Geschichte des byzantinischen Staates*, 3. Auflage, München, 1963 (*Byzantinisches Handbuch im Rahmen des Handbuchs der Altertumswissenschaft* 1, Teil, 2, Band), p.172; G. ネスターロフとヌスキー (和田廣訳) 『ビザンチン帝国史』 恒文社、二〇〇一年、二六四頁。
- (62) E. Э. Липниц, Восстание Фемы Славянина, in *Очерки истории византийского общества и культуры VIII – первая половина XI века*, Москва-Ленинград, 1961, pp.212–228. 著者 E. M. Я. Своянов, Второй период Иконоборчества in *История Византии*, том III, Москва, 1967, pp.65–79; М. Раikovић, О пореклу Томе, воше уст анка 821–823 г, *ZRV* 2, 1953, pp.33–38 (idem, Sur l'origine de Thomas, chef de l'insurrection de 821–823, *ibid.*, p.38); А. П. Кажган, Византийский Временник 30, 1969, pp.278–280, esp.280 (次の注(63)のルメルン論文の書註)。
- (63) P. Lemerle, Thomas le Slave, *Travaux et Mémoires* 1, 1965, pp.255–297.
- (64) *MGH*, Legum sectio III; Concilia tome II, pars 2, pp.475–480.
- (65) C. de Boor (ed.), *Georgii Monachi Chronicon*, 2 vols., Leipzig, 1904, repr.1978, pp.793.7–797.16. それ以外に關係する史料記述の内容検討は、ルメルン論文 (pp.255–283) やトプシユタインの論文 (pp.63–65) に詳し。
- (66) *Theophanes Continuatus*, II.10, pp.50.18–52.7 (version A) : 11–12, pp.52.8–55.11 (version B) ; *Genesis*, II.2–3, pp.23.80–25.49 (version B) ; 4, pp.25.50–26.83 (version A) .
- (67) シニエスニコドモニエルは、あらためて二つの異本の整合を試みて、二人の叛徒トマスという独創的な説を提示することになった。すなわち、侵攻軍の指揮者であるスラヴ人トマスとは別に、レオン五世に親しく、フォイテラトイのトウルマルケスに任命されたアルメニア人のトマスなる人物がいたのだという (バルダネスの従者とされるのも彼の

- 方)。つまり、この二人を後世の史料は混同したため、二つの異本が生じたと主張した。けれども、想定されるアルメニア人トマスについてはレオン没後の行動はほぼ不明なままであり、彼の説には同意しがたい。Signes Codoner, *The Emperor Theophilus and the East*, 829-842, pp.183-200.
- (68) F. Barišić, *Généstios et le Continuateur de Théophanes*, *Byzantion* 28, 1958, pp.119-133; idem, *Les sources de Généstios et du Continuateur de Théophanes pour l'histoire du régime de Michel II (820-829)*, *Byzantion* 31, 1961, pp.257-271.
- (69) H. Köpstein, *Zur Erhebung des Thomas*, pp.70-71. トマスの乱についてのその後の研究・概説としては、すでに言及したニコエヌニコメニエルの著書以外に、Brubaker & Haldon, *Byzantium in the Iconoclast Era, c.680-850: a History*, pp.386-388; F. Winkelmann, *Quellenstudien zur herrschenden Klasse von Byzanz im 8. und 9. Jahrhundert*, Berlin, 1987, pp.66-68; W. E. Kaegi, *Byzantine Military Unrests*, pp.261-2; Treadgold, *Byzantine Revival 780-843*, pp.234-244 などがある。
- (70) Werninghoff (ed.), *MGH, Legum sectio III: Concilia tome II, pars 2*, p.476.20-25. 引用箇所は Armeniaei は明らかにブルメニアコイであり、よって ducem (dux) はテマ將軍と解釈すべきである。一方、Armeniae ducatum とはやはり帝国領外のアルメニアを指していると思われる。問題となるのは、Chaldene ducatum である。これは「トラスパンスキーのタクティコン」(八四二／三年)に登場するテマ・カルデアアのことなのだろうか。しかし同史料にはカルデアアのドゥクテスも確認され、判断しづらい。cf. Oikonomides, (ed./tr.), *Les listes de présence byzantines*, p.53.4 (doux Chaldia); Brubaker & Haldon, *Byzantium in the Iconoclast Era, c.680-850, a History*, p.760.
- (71) *Genesis*, II.2, p.23.15-20; *Theophanes Continuatus*, II.12, p.55.6-8.
- (72) トマスの乱に言及する聖人伝については、ルメルル論文の二六一—二六三頁とケプシュタイン論文の六五頁を参照のしよ。
- (73) *Theophanes Continuatus*, II.11, p.53.15-17. cf. *Genesis*, II.2, p.95.
- (74) 拙稿「テマ反乱についての覚え書」注(8)を参照。
- (75) *Theophanes Continuatus*, p.52.10-12.
- (76) cf. W. E. Kaegi, Jr., *The Byzantine Armies and Iconoclasm*, *Byzantinostanica* 27, 1966, p.67.
- (77) *Genesis*, II.3, p.25.46-47.5.37.

- (78) *Genesis*, II.5, p.27.22 ; p.29.70, 73 ; *Theophanes Continuatus*, II.14, p.57.19 ; II.16, p.63.18. 彼は後に捕えられて処刑された。
- (79) *Genesis*, II.4, p.26.73 ; II.5, p.26.91-92 (コンスタンティオス) ; p.27.33 ; II.8, p.31.46 (アナスタシオス) ; *Theophanes Continuatus* II.10, p.51.22 (コンスタンティオス) ; 14, p.58.16 ; 18, p.58.6 ; 19, p.71.1 (アナスタシオス)
- (80) これまでの考察や研究史の流れから、反乱がイコノクラスム政策への反対を原因として発生したとは考えにくい。また、もしも反乱がレオン五世に対する蜂起であったなら、私が提示した「小アジアのテマ軍団に支えられた政権」という図式が、八世紀とは異なりすでに破綻していたことになる。
- さらに推測を付け加えると、トマスの乱に際して彼がコンスタンティノスを称したというのは、もしも事実であるならば、それはイコンを復活させたコンスタンティノス六世ではなく、殺害されたレオン五世の息子、改名してコンスタンティノスと呼ばれた人物が意識されていたのかもしれない。このように考えれば、反乱の理由は皇帝レオンの殺害であり、かつてのように「小アジアのテマ軍団が支持する」政権を標榜したという推論が引き出せるだろう。ただし、トマスの養子の名前コンスタンティオスからは、トマスが称したコンスタンティノスとは四世紀の帝国の初代のコンスタンティヌス一世(大帝)であった可能性もある。いずれにせよ、史料記述からの根拠は存在しない。
- (81) cf. Brubaker & Haldon, *Byzantium in the Iconoclast Era, c.680-850 : a History*, pp.531-572.
- (82) *Genesis*, II.2, p.23.90-93 ; *Theophanes Continuatus*, II.11, p.53.6-9.
- (83) *Theophanes Continuatus*, II.11, p.54.3-7.
- (84) アモリオン人のミカエルはレオン五世の右腕のような存在だったと見られるが、かつてレオン三世が盟友のアルタバストスをオプシキオンの司令官に任命して小アジアのテマ軍団全体の掌握に努めたのに対し、ミカエルの場合は、首都防衛という点でオプシキオンとの共通点はないわけではないものの、テマ軍団とは直接関係しない近衛連隊の連隊長に任命された点は興味深い。
- (85) 残念ながら、陰謀加担者の詳細は不明で、ミカエル二世の政権を支えた人々を明確にすることは困難である。拙稿「ビザンツ政治史考——九世紀アモリア朝について——」の第三章も参照。
- (86) 拙稿「七・八世紀におけるビザンツ中央政府の動向——元老院を中心に——」(『人文論究』六二巻一号、二〇一二年、

- 一―一八頁)の第二章などを参照。
- (87) 拙稿「レオン三世政権とテマ」『関西学院史学』(三八号、二〇一一年、一―二七頁)を参照。
- (88) 拙稿「八世紀後半のビザンツ―エイレーネー政権の性格をめぐって―」(『西洋史学』一七四号、一九九四年、三六―五三頁)や「イサウリア王朝下の陰謀事件をめぐって―八世紀のコンスタンティノープル―」(『歴史家年報』九号、二〇一四年、一―一七頁)を参照。
- (89) 拙稿「八世紀後半のビザンツ」の第一章(二)を参照。
- (90) さらにエイレネ女帝期には、宦官スタウラキオスによる首都での陰謀とカッパドキアでの蜂起が計画されている。事件の詳細は不明であるが、ともかく重大な事態とはならなかった(*Theophanes*, p.474.22-475.9 AM 6292)。